

書評

[評者]
朝田 隆
筑波大学・精神医学 教授



認知症のスピリチュアルケア ころのワークブック

エリザベス・マッキンレー,
コリン・トレヴィット 原著
遠藤英俊, 永田久美子, 木之下徹 監修
馬籠久美子 翻訳

B5判 頁104 2010年
定価2,100円(本体2,000円+税5%)
[ISBN978-4-880-02701-2] 新興医学出版社刊

私が認知症になったら、さぞかし意地悪のボケ爺さんになることだろう。となると、ケアスタッフから大いに嫌われる可能性が高い。悪態をつくか、自虐ネタで笑いをとるかはわからないが、本心ではさぞかし淋しかろう。そもそも自分が壊れてゆくことは、多少とも自覚できるようだ。また人並み扱いされず、人が自分から去ってゆくうえに、意地悪への仕返しでもされたなら、さぞかしへこんでしまうことだろう。

そんな意地悪爺さんも含めた認知症の人を励ますとしたら、何より大切なのは「私は人から必要とされ尊重されている」という実感と「希望」とをもってもらうことだと思う。

本書はこの2つの課題にどう対処するかの手引書である。それを実現するためのコミュニケーション方法が、本書のメインテーマであるスピリチュアル回想法である。

本書にある Kitwood の記述のように、つい「認知症の人は、理解も洞察もできないから、自分の意思では決められない」と思ってしまいがちである。だから忙しい認知症の医療や介護の現場で、「おしっこしたいの?」と尋ねることはあっても、「あなたの人生で

一番大切なものは何ですか?」と問うことはまずないだろう。

ところがこのスピリチュアル回想法の根底には、「人は認知症になった後でも人間としての成長が続けられる」という確信がある。そしてその「人生に対する思い」を傾聴することこそ一個人として認めることだと述べ、そのような場で必要な心得・技術をわかりやすく説いてゆくのである。確かにこのような姿勢を貫くならば、必ずやその心には「希望」が芽生えるに違いない。

この「希望」については、本書に記された故小澤勲先生の言葉が印象深い。「痴呆を病むということが、人の手を借りて生きざるを得ないということだとすれば、希望は人と人とのつながりに求められねばなるまい。希望に誘うその手は優しさに加えて痴呆を病むことの困難さを知りつくしていなければならない」

認知症の医療・ケアに携わる者として、たとえどれほど疲れていても、この言葉に反応できるころの鮮度はもち続けたいものだ。

以上のような感想をもって本書を読み終えた。皆様には是非ともご一読をお勧めしたい書である。